
幼児教育における

絵画の評価と指導

山 本 道 子

——美術教育のあゆみ——

わが国の幼児教育機関において戦前戦後を通じ一貫して絵画製作が重要視されてきたことは注目されてよい。明治九年の幼稚園創設以来、絵画製作は保育内容の中心的なものの一つとして取り入れられてきた。ただし当初における絵画製作の根本的な考え方は、単純な形の模倣から次第に高度で複雑な模倣へ進むというように、子どもに模倣的な作業を与えて目と手の訓練を施し、習熟した後自由に

な表現に向かわせるべきであると考えられていた。大正六年に至り、山本鼎の自由画運動によって幼児の絵画製作の教育が、成人中心の主知主義的なものから幼児を中心とした自由な活動へと、全面的变化が主張されたにも拘らず、現場の教育実態は依然として「大人の作品や、自然物の模倣」をさせることを中心としたものであった。ところが終戦を境として美術教育の根本的思想は一変し、従来の技能中心教育から幼児を中心とした自由な活動へと変化してきたことは周知のことである。戦後、数年間アメリカ教育使節団のアドヴァイスの線にそった図画教育がすすめられようとしていたが、まだ何といっても美術教育についての発言権は、有名な画家の側にあり、「絵かき主義」の時期ともいえるものであった。彼らは美術界そのものの無政府状態を反映して主観主義に流れ、必ずしも教育的配慮がなされているとはいえない難い状態であった。このような美術教育界を背景として新しく登場したのが創造美術教育の創立者である久保貞次郎氏である。同氏は欧米諸国での経験をとり入れた新美術教育の理論と作品とをもって論争に加わり、以後の斯界における主流をなすところの創造美術教育（以下、創美という）の運動をくりひろげたのである。

この創美の立場は、アメリカ教育使節団の報告の影響もあって、すべての子どもは生まれながらにして創造力を持っているものであり、外部からの抑圧や不当な干渉を避けて、創造的な活動を励まし

育てるべきであると主張する。したがって、美術教育の方法は従来のそれを否定し、環境からの圧力を除き、子どもの精神を解放し、自由な雰囲気を作りだして、刺激、賞賛、承認、激励を与え、子どもの創造力を励ましてやることであるとす。また、このようにして描かれた作品からは、子どもの個性や、感情や、環境の状態の診断を行なうことができる。このような創美の考えは、フレール以来、支持されている幼児の自発性を重んじる保育原理とも一致し、又精神分析ないし、臨床心理の理論にも裏づけられ、人間形成の心理からみてもすぐれた理論であり、実践面でも非常な進歩をみせ、この創美運動によって、わが国の児童美術の水準は飛躍的進歩をとげると同時に児童画を心理的角度からみる見方をも進めたのである。

ところが、最近この創美に対して批判的態度をとる主張が現われた。その主なものをあげると、一つは生活つづり方的考え方と深い関係をもった、いわゆる新リアリズムに立つ美術教育であり、これは子どもが創造力を先天的に持っているという創美の主張を否定し、創造力は現実の認識から生まれるものであるから現実認識こそ創造力の基盤であるとする主張である。

創美と新リアリズムの美術教育とを比較してみると、前者は描画を自己表現とみるのに対し、後者は認識過程を重視し、前者が人間形成とか、抑圧からの解放とか唱えながらも、ややもすると恣意的な人間形成に陥りがちであるがゆえに、はたして、よい社会の形成

に参与できるかという疑問を後者は提出する。更にまた、精神の解放とともに幼児期においても集団の中で互いの話し合いを媒介として物の認識をたしかなものにし、できるだけ視覚的に正しいものに発達させようとするのが新しいリアリズムの主張の要約である。

また、もう一つの批判は、造形教育の立場からである。われわれ人間は、皆、造形の世界に生活するのであるから、すべての人間が造形に対する批判力、鑑賞力、創造力が必要なのであり、その造形の原則や、要素を組織的に指導すべきことを主張するものである。

その他、美的情操を養うことを目標とする芸術中心的な考え方や、プラグマティズムを根拠とする生活芸術的な考え方などがあり、現在の美術教育界は、このような流れのもとに発展しつつある。

—— 本 論 ——

一、研究の目的

以上述べたように美術教育においては、意見や立場の違いがあるが、それら異なる見方の中にも絵画製作を幼児教育の一環として見た場合に、何か主流になるものがありはしないかという考えのもとに、それが何であるかを現時点において把握すること、および前述の美術教育界の立場の相違が教育現場または、幼児の父兄の考え方の中で、どのようなくい違いとなつてあらわれるかを研究しようとした。

二、研究の方法

1、調査方法および対象

質問紙法による。(A)教師に対するもの、(B)親に対するものの2種類で、(A)は自由記述を多く、(B)は選択法を多くした。更に、(A)、(B)両方につけ加えて幼稚園、幼児画展の中から取りあげた幼児画8枚の絵を見せて、その中から最も良いもの、悪いものを選んでもらい、それらの結果に基づいて幼児画教育の現状を考察した。

対象は、兵庫県の南部一帯を中心に、神戸市、枚方市などの幼稚園教師と保育所保母、計一〇二名と、主として4〜6才児を持つ母親二〇〇名である。期間は、一九六五年三月六日〜四月六日。

2、調査内容

(1)美術教育についての考え方、(2)幼児画に対する評価、(3)指導の各々の面について教師の立場、親の立場の両方からその考え方を聞いた。

(1)美術教育をいかに考えるかという面については、教師の立場からは、子どもの絵画製作についての考え方を、単なる芸術的なものを主とする立場から、もっと広く教育的立場を含む5つの項目にわたって調査した。親の立場からは、幼児画に対する考え方についてたずね、更にそれと子どもの人格形成との関連について12項目にわたって質問した。

(2)評価に関しては、教師について、①概念的、技術面を重んじる立場、②創造的能力の伸長を重んじる立場、③美的情操を重んじる

立場、④認識を重んじる立場、⑤その他、以上の5つの場合について質問し、更に各立場から具体的な評言を挙げてもらった。親側からも教師の場合と内容的には同じようなことを12項目挙げて選択してもらった。

(3)指導に関しての質問は次の通りである。教師側からは、子どもが絵を描いている時、実際に直面すると想定される場合、即ち、(1)何も描かずに困っている場合、(2)大人が見て画題の見当がつかないような絵を描いている場合、(3)模倣的又は、概念的な絵を描いている場合、(4)色や形が大人の目から見て全く見当はずれな絵を描いている場合、(5)絵自体が投げやりな乱雑な絵である場合、(6)鉛筆や、細い線でこまかいところまで描く場合、(7)画用紙からはみだすような絵を描いた場合、(8)いじけた小さい絵を描く場合、(9)正確に描写しようとして思うように描けずに困っている場合、(10)同じ画題ばかり描く場合、(11)ぬり絵ばかり好んで描く場合、(12)絵を描くことがきらいな子どもの場合、(13)その他、指導について特に心がけていることなどの14項目を挙げ、それに対する具体的指導法を聞いた。尚子どもは、作品の処理方法、鑑賞力への指導についても質問した。親には、子どもの絵に対しての関心の度合、即ち指導的意志の積極性、消極性を知るために7項目の質問をし、更に実際指導をするに当たっての態度について9項目の質問をした。絵については、いろいろな立場を代表する作品で、一応の完成度に達していると思われる絵8枚を

用意し、それについて各人の意見をたずね、最も良しとする絵と、思わしくない絵を選んでもらった。その他、ぬり絵についての考えも聞いた。

3. 結果及び考察

この調査に当っては教育専門家である教師に対する質問事項の内容や数が親に対するそれとは必ずしも一致しないため、結果において両方を比較すべき共通の正確な数字を得られなかったが大体の傾向を知ることができた。

(1)美術教育に対する考え方については、教師の場合、創造性、自主性の形成に及ぼす効果を求めるものは77%であり、美的情操を高めることを望むものは27%であった。尚、直接的ではないが心理診断、環境診断の手段とする立場は31%であった。親は美術教育に対して、創造力、観察力などの成長を望むものが64%、美的情操を高めることを望むものは60%であった。このように教師も親も絵画製作を通じて人間形成を期待しているものが多いが、美的情操を養うという点では親の方が重くみている。これは教師の場合、そのほかに絵画製作を通して心理診断、環境診断をしようとする意図もあるということが理由として考えられる。

(2)評価に関しては、教師の評価態度と、各立場からの具体的な評言から、そして母親に選んでもらった項目からその傾向を判定すると、表1、2のような結果を得た。

表1 (評価態度分類1) %

評価態度 対象	%					無答
	N	S	Ns	Sn	その他	
教師	15	41	9	18	11(4)	6
母親	4	15	25	43	10	3

表2 (評価態度分類2) %

評価態度 対象	%			無答
	N (N+N _s)	S (S+S _n)	その他	
教師	24	59	11(4)	6
母親	28	59	10	3

N: 認識を重んじる立場
S: 創造性を重んじる立場
Ns: 認識を主とし、創造性をも含む立場
Sn: 創造性を主とし、認識をも含む立場
その他: 認識、創造、美的、技術などを含んだ立場のもので数も少なく型としても散らばっているので特にとりあげなかった。その他の(4)は、認識と創造性を重んじる立場で、それらは互いにバランスのとれていると思われる立場である。

表1からNとSの立場を大別したのが表2である。

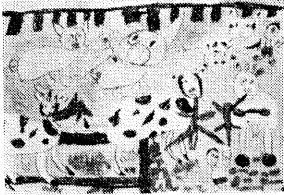
表1、2から分るように、主な流れを大別すると、創造性を重んじる立場と、認識を重んじる立場の2つに分けることができる。特に創造性中心の見方が認識中心の見方よりも優位である。(教師、親共)純認識の立場は別として、認識を含む複数型のもは親の方が多くなっている。しかし、これは質問紙の性質上、親が外界の事物を認識するということについての正しい解釈にもとづいた答なのかどうか疑問である。質問紙において親には認識に関する項目に「よく考えて一生懸命に描いたと思われる絵」というのがあり、これがSnに

において23%占めており、Nsにおいても50%ある。「この一生懸命に描く」ということは、必ずしも本質的に絵画製作の態度に限らず、生活態度一般として望ましいことであるので、必ずしも認識項目に属さないとも考えられる。教師の場合、この項目が少ないのは問題を描画に限って考えたためであろう。このように考えて、親側のSnの23%とNsにおける、この項目を除くとわずかSnは20%と減少し、Nsの認識と創造性のバランスは変化し、認識的な立場に重点をおく見方が減少することになる。教師の場合は、このような点で親より認識的立場を正しく解釈した上で、それに重点をおいていると考えてよい。しかしながら認識的立場に重きをおくものは割合少ない。又教師に挙げてもらった評言を分類すると、「のびのびと力強い絵」「動きがある絵」「思うままに描いた絵」等、90%の教師は創造性を重視したものであった。その他、「よく観察している」とか「体験がよく現われている絵」等、認識を重視しているものは38%で、純粹に美的感覚を重んじているものは27%である。これらを総合的に検討してみると前述したように、二つの流れの中にも特に創造性中心の見方が、認識中心の見方よりも優位であるといえる。

又、依然として旧来の概念画をとる立場のものは、教師にはなく、親には2%強という少数であるがあった。このことは、8枚の幼児画の評定の結果にも表われている。表3は教師と親に8枚の幼児画について最も良い絵と、悪い絵を選んでもらった結果である。

表3 (幼児画評価比較) %

対象	絵 評価	A	B	C	D	E	F	G	H	無答
		教師	一番良い	1	16	21	24	1	1	7
教師	一番悪い	32	1	0	5	11	7	4	9	33
母親	一番良い	3	6	10	34	13	3	8	4	19
母親	一番悪い	19	2	2	2	5	3	3	4	60



D. 田舎の牧場



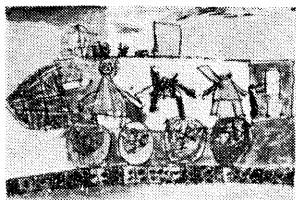
C. 大男と小人

この表から分かるように、選んだ絵については、教師と親は大体同じ傾向を示しているが、絵Eについては教師と親の間にズレがある。掲載写真を参照しながら各絵について簡単に述べるとD「田舎の牧場」これは教師も親も一番良いと評価している。理由は「よく観察している。子どもらしい」などを挙げています。

C「大男と小人」これも大体、教師、親共良いと評価している。理由は「素直で」のびのびと思った通りに描いている。夢が表現されている」等を挙げています。

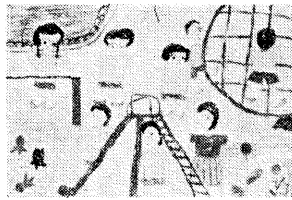
A「忍者の戦い」教師も親も一番悪いと評価している。理由としては、「概念的、模倣的、子どもらしくない、色が悪い、画題が教育上良くない」などを挙げています。

E「お遊び」これは前述した教師と



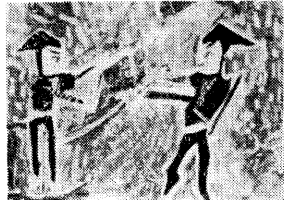
B. 汽車

F「遠足」これはあまり教師に好まれなかった絵で、「概念的、動きがない」と批評されている。



E. お遊び

G「自動車修理工場」よく観察している。よく考えている」等を挙げ、良いと評価するものが教師にも親にも大分あった。



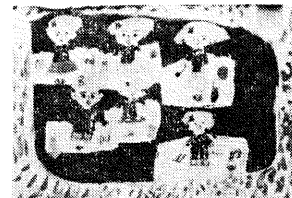
A. 忍者の戦い

親の間にズレがある絵であり、教師は悪い方から2番目になっているが、親は良い方から2番目になっている。悪いと評価した教師側の理由は「概念的、子どもらしくない。動きがない」等であるのに対し、良いと評価した親は「子どもらしく、素直で楽しそうな絵」だと挙げている。このような教師と親のズレは、創造性を重んじる立場と概念画もよしとする立場のズレであると思われる。



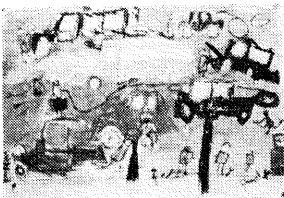
H. 運動会

また「ぬり絵」に対する態度については、表4のごとく教師側では、悪いというものが非常に多く、その理由は概念的になる、創造的能力が伸びないというものがほとんどであり、特に8%の教師は強く否定している。勿論、良いというも



F. 遠足

以上のように、良いと選ばれた共通点は「子供らしい」「素直である」「のびのびと思った通りに描けている」という評言のものであり、悪いと選ばれた理由の共通点は、「概念的である」「子どもらしくない」等を挙げることができる。これらの評言から創造性を重視した傾向があらわれていると思う。



G. 自動車修理工場

H「運動会」これは「子どもらしくて楽しそうで良い」と評価するものと、「粗雑である、色彩が悪い」等の批判があり、良いと評価するものと悪いと評価するものに分かれている。このような分離は、創造性を重んじるものと認識を重んじるものとの差ではないかと思われる。

表4 (ぬり絵についての態度) %

評価	悪い	点もある 良い	良い	無答
対象				
教師	52	29	0	19
母親	27	18	14	41

のは一人もない。しかし、親側では良いとするものが14%あり、そのうち4%が大変良いと積極的な肯定をしている。これは、やはり教師は創造性を重んじる立場から当然なことであって、親の側では少数ではあるが、概念画が良いと思うものもあると解釈できるし、前述の幼児画の評価の場合と関連づけられると思う。

(3) 指導については、教師の場合、具体的に答えた指導法のおもなものを大きく分類すると、①自由(放任)にしておく、②精神的に働きかける(話し合う、たずねる、はげます、精神状態を考察する)、③具体的に転換させる(材料をかえる、実際に見せる、具体的に刺激を与える)の三つに大別できる。そしてこれら三つの比率は、①「自由にしておく」を1とすれば、②「精神的に働きかける」が4、③「具体的に刺激を与える」は2という割合であった。

全体的には精神的に働きかける方法が主であり、これには「何も描かずに困っている場合」「何でもいから描いてごらん」というようにさそいかけ、描くように刺激を与え、「投げやり、いじけた絵」の時も話しかけ、体験したことや、知っていることを呼び覚ましてやる方向に導いている。「正確に描写しようとして困っている」場合も、「見たまま、感じたまま、何でも描いていいのよ」等、精神

的に働きかけている。

自由にしておくとか、放っておくのは、「画題の見当がつかない時、色や形の見当はずれ、細かい所まで描く」時などであり、「画題の見当がつかない」時は放っておくだけでなく、自由にさせておきながら、質問したり、話し合うことによって何を描いたか理解する。

具体的転換としては、「細かい所まで描く、同じ画題ばかり描く」時に多く行なわれ、興味を転換させるため画題を与えたり、材料を変えてやったりする。「模倣的概念的な絵」を描く時は、実物を見せたり、お話をしたりする。「絵を描くことのきらい」な場合は、何でも描いてごらん」といってクレヨン遊びなどとして、クレヨンの楽しさを体験させるなどいろいろ工夫されている。「はみ出す」時は、紙をつぎ足す、与えるが圧倒的に多い。教師が特に心がけていることとしては、子どもが感じたまま、思ったまま描かせようとしているのが多く目立った。このように、指導についても創造性を伸ばすという点に比重がかけられていると思う。

作品処理、鑑賞能力を養うための指導としては、子どもの描いた絵を皆で見えて話し合ったり、また貼付けするようである。これは鑑賞能力を養うことと同時に、子どもが承認されたという喜びを得、発言能力も養われ、次の機会への意欲を起こさせるなど広範囲にわたる意味を有すると思う。親側では、教師の場合のように具体的場面对する質問ではなく、一般的に絵(幼児画)というものについ

ての質問であるため、共通の統計として数字を示すことはできないが、指導してやった方が良くと考えるものが、指導しない方が良くと考えるものより、やや多く、指導のポイントとしては創造性を伸ばそうとする傾向が圧倒的に多く見られるが、積極的に参加する傾向は少なく、好きなように自由に描かせておくというのが非常に多い。事物を認識させようとする傾向もかなり見られるが、やはり積極的な指導は少ない。このように親側の指導は、積極的干渉よりも、関心をもちながら、しかも自由に描かせるというのであるが、これは結果として消極的放任になっているのではないかと思われる。

親側の幼児画に対する認識は教師より低いのは当然としても、家庭という有力な教育の場での分担すべき責任は大きく、適当な機関を通じ適切な方法によりこの方面の啓蒙もないがしろにさるべきではない。ただし、親の理解が一知半解ではむしろ害毒を及ぼすことも考えられる。創造とか認識とかの本質的な意味を十分理解させることが必要であり、その啓蒙方法については、よほど慎重を期すべきである。以上のように、幼児画の評価と指導については、創造性を重んじることを主張する流れが主であるが、それと共に認識活動および、美的情操を養うという考え方も相当とめられる。

—— おわりに ——

言語のまだ十分発達していない幼児にとっては、絵画製作は幼児自身の感情や思考や夢を実現してくれるものであり、幼い子どもた

ちの最も興味を引く活動の一つとなっている。この面に関しては、たしかに創美の主張する精神の抑圧解放が大切であるが、調和のとれた全人間としての人間形成の基礎をなす美術教育としては、ただ創造性を伸ばすために抑圧解放という点のみに重点をおきすぎた考え方は片手おちであり、不十分であると思われる。前述の如く外界の事物の認識によって創造力は豊かになるのであるから、知覚や感覚を通しての感動的経験によって感覚認識を深いに深めていくことが望ましいのであり、幼児に体験させ、より深い興味をおこさせることにより感覚や表現力も養成され、いつそ子どもの関心を深めると考えられる。このような良循環を形成することができるとすれば、幼児の精神の全的発達によりよい方向に展開するのではないかと思う。幸いにも、絵を描くことは、子どもにとっては本来最も興味のあるものであるから、この関心を利用して積極的な認識指導を行なうことも真げんに考えられてよい時にきているのではないだろうか。

(姫路短期大学)

- 守屋光雄 発達心理学 朝倉書房
霜田静志 児童画の心理と教育 金子書房
武井・ローエンフェルド著 美術による人間形成 黎明書房
久保貞次郎 児童画の世界 大日本図書
川口 勇 創美をこえて 黎明書房
栗岡英之助 生活リアリズムの美術教育 明治図書
教師養成研究会 幼児画の絵画製作 学芸図書
現代教育科学 一九六四・十、十一、十二 明治図書